

## SUBARU と太陽系小天体の観測的研究

## Observation plan of small solar system objects by SUBARU telescope

# 石黒 正晃[1]

# Masateru Ishiguro[1]

[1] 宇宙研

[1] ISAS

<http://zodi.planet.sci.kobe-u.ac.jp>

1999年1月すばる望遠鏡（国立天文台ハワイ観測所）はファーストライトを迎えた。有効口径8.2メートルという大きさだけでなく、画期的な最先端の観測装置を備え、天文学に新たな可能性を与えてくれている。惑星科学の分野でも、すばるがもたらしてくれた成果は大きい。世界的に類のない主焦点広視野カメラを用いたエッジワース・カイパーベルト天体（木下ら）のサーベイやサブキロメートル小惑星（吉田ら）は太陽系内に潜む小天体を効率よく検出し、そのサイズ分布などについて明らかにしてきた。河北らは可視高分散分光器を用いて、リニア彗星の観測から彗星ができた当時の温度環境を推測した。中村らは近赤外分光器を用いて冥王星・カロン系の分光観測を行い、冥王星表面に新たな分子を検出した。安部らは近赤外撮像分光器を使って MUSES-C 候補天体の温度環境や表面組成を調べた。

このように、他に類を見ない最先端の観測装置を使えばすばるの可能性はいくらでもあると思われる。ここでは今までに行われたすばるの観測を振り返りながら将来の太陽系小天体の観測について検討する。